町長ひとりごと ㊻

斉藤 譲

旅行シーズンを迎えた。全国どこの観光地も、大勢の観光客で賑わっているとテレビや新聞が報じている。

なるほど、高速道路はどこも満員の客を乗せた観光バスが数珠つなぎに行き交い、ホテルや旅館は、若者からお年寄りまで入り混って溢れるばかりの盛況さである。

つくづくと日本の平和と豊かさを実感するシーンである。中東情勢の緊迫や国会で大きな論議を呼んでいる国連平和協力法案の行方、懸念される景気の先行不安などは、この姿を見ているとまるで絵空事のように思えてくる。

最近の国会審議や、政治討論会等を聞いていると、与野党問わずやたらと「国民の声」だとか「国民の意向」などという言葉が連発されているのが気にかかる。

国民は、自らが選んだ「選良」に国の政治を委せているのである。だからこそ国民は、日々仕事に励み、レジャーを楽しんでいられるのである。

これを事あるごとに、また与野党が対立する度に、本来なら国会で選良が、自らの信念をもち相互に智恵を出しあって解決を図るべきことまでも猶予し、それを国民に問おうとする姿勢はあまりにも無責任であり、選良自らが間接民主主義の原則を崩すものといわざるを得まい。

斯言う私も、選び任された者の一員。改めて責任の重さと、決断・実践の大切さがつくづくと身に泌みる昨今である。

▼ところで、九月中旬岐阜県に二泊三日をかけて視察をする機会があった。実は、私は〆切日の迫った原稿を、何とかこの旅行の間にものにしようと原稿用紙をカバンに忍ばせていったのであるが、残念ながらバスが小型で満員のうえ、夜は夜で風邪のために熱や咳が出て、とうとう一字も書くことができないまま帰ってきた。尤も、出かけるときになってもまだ何を書くかも決まっていなかったのだから仕方がない。

家に着いて、さて何を書こうかと改めて考えたとき、思わず頭に浮んだのが、帰りのバスの中で見たビデオ映画である。バスの旅だと、帰りは誰もが飲み疲れ、歌い疲れでグッタリとなって意気消沈するので、ビデオ映画の鑑賞が通り相場となっているようだ。

男はつらいよ

帰りの道中が長かったせいもあって、三本の映画をみたのであるが、その中の二本は寅さんシリーズでおなじみの、「男はつらいよ」であった。

▼「わたくし生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯をつかい、姓は車、名は寅次郎。人よんで「フーテンの寅」と発します。」

寅さんのきるこの仁義を聞いただけで楽しくなってくる。この映画はシリーズになっているが、どれも筋書は同じである。渥美清が扮する旅商人「フーテンの寅さん」の、ドン・キホーテにも似た骨稽な男気と純情さが、旅で捨った片想いの恋を故郷柴又にもちこんで一騒動をひき起し、果てははかなく散った恋の痛みを抱いて、さびしくまた旅に出るといった単純なストーリーである。上品下品、硬軟自在に口をつく寅さんの客寄せ口上は天下一品で、おまけにあの独得な姿、形であるから、どこから見ても立派な大道香具師のお手本である。

この寅さんが、一度かわいい女性に出逢うとたちまち恋心にとりつかれ、まるで純情な子供のようになって、その女性のために尽くそうとする。理屈にもならない恋の横車を押し通すのであるから、周囲はたまったものではない。

柴又で細々とダンゴ屋を開く「虎屋」の叔父夫婦、心やさしい妹さくら夫婦、それに虎屋の隣で「タコ」と渾名される零細企業の社長。ここに登場する人たちは、いずれも下町人情のあふれる世話ずきで、お人良しな者ばかりである。この人たちが、寅さんがひき起こす騒動に巻きこまれ泣いたり、笑ったり、怒ったり、悲しんだりのドタバタ劇を演ずるのである。寅さんのあまりの無謀さに、叔父さんが少しでも意見をしようものなら、「それを言っちゃあ、お終いよ」と逆に居直るのである。思わず、噴き出してしまう場面である。

▼私はこの映画の魅力は、世情にとらわれず、直情径行的ではあるが、自分の意見を通そうとする寅さんの男意気と、その裏にかくされた男の哀歓が縦糸となり、貧しくも心寄せあって生きるやさしい下町人情が横糸となって綾なす人間模様にあると思っている。

それが、いま失いつつあるものへの郷愁となって、大衆の共感を呼んでいるのではないだろうか。

▼歌の文句じゃないけれど、義理と人情を秤にかけて、世間を渡る男はつらい。儘になるなら世間を捨てて、寅さんみたいに生きたいものと、願う心は皆同じ。